

留学に頼らない「学内グローバル PBL」授業設計に向けた考察 (外国人学生と日本人学生とのグローバル PBL を通して)

佐々木 宏^A

An Effective Class Design of an “On-Campus Global PBL” (A case of Global PBL with both international and Japanese students)

Hiroshi SASAKI^A

Abstract: As globalization advances, global education has become an issue of great urgency in Japan. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) is implementing a plan to double the number of Japanese students studying abroad by the year 2020. However, global education has already lost its appeal in Japan, except among a portion of elite class students. Measures must therefore be taken to make global education more attractive to students who currently have no interest in participating in international exchanges or studying abroad. The “On-Campus Global Project-Based Learning” program, which involves international students studying in Japan and uses English as the language of communication, is now considered as an effective means of global education that does not rely on studying abroad. Based on observations and interviews with Japanese students who participated in Global PBL, this paper is a study of an “On-Campus Global PBL” lecture planning.

Keywords: international student, PBL, competence, class design, study abroad

1 はじめに

我が国にとって、グローバル教育が喫緊の課題となった今、文部科学省は第2期教育振興基本政策の中で、2020年を目処に、日本人学生の海外留学者数を12万人に倍増する計画を打ち出した。この数値は、同一年齢の者のうち約10%が概ね20歳代前半までに1年間以上の留学ないし在外経験を有する環境を目指したものであり、現状から考えれば大きな変化といえる。しかしこれは、加藤¹⁾が「別の言い方をすれば、全国の約9割の若者は、その補助を受けることができない」と指摘したり、民主党政権時のグローバル人材育成会議でも、「新たな時代の我が国の成長の牽引力となるのがもはや一握りのトップ・エリートのみであることを意味しない」²⁾としたとおり、今日本が取り組むべき政策は、留学を推進する一方で、今成長しつつある日本の全ての若者が、留学せずとも、効果的

にグローバル人材の要素を持つことができるような教育を考え、構築することであろう。これらの社会背景より、日本国内で擬似留学体験のできるグローバル教育の設計は重要であると考え、各大学内にいる留学生と日本人学生が英語をベースとしたワークショップを通じ、グローバル人材に求められる要素を育む「学内グローバル PBL」の授業設計について着目した。

PBLとは、Project-Based Learningの略称で、課題解決型学習として近年多くの大学で採用されている授業メソッドのひとつである。

グローバル人材の要素については統一された見解は確立されていない。前掲のグローバル人材育成会議では、グローバル人材に求められる要素として、Ⅰ：言語力、コミュニケーション能力、Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティとして3群に分けて提示している³⁾。これらの要素については、ほぼ誰もが合意できる内容である

A:広島大学産学・地域連携センター

ものと推察するが、筆者はさらに産学人材育成パートナーシップグローバル人材委員会⁴⁾が記した『異文化の差』をもった多様な人々の中で比較した場合の、自分を含めたそれぞれの強みを認識し、それらを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すこと」、勝又⁵⁾の「異文化の衝突を楽しめる」という点にまで踏み込んだ要素を意識したい。国境を越えたコミュニケーションでは、文化的差異から生じる対立はつきものである。グローバルコミュニケーションとはつまり、「違い」を前提としたコミュニケーションによって生じる「対立」を楽しみ、そこから「第三の選択肢を当事者同士で創造するプロセス」と考えるからである。人材の流動性が今後益々高まることから、大きな利害関係が発生しない大学時代に異文化交流を通じた第三の選択肢を創造する体験を積んでおくことは極めて重要である。

そこで本稿は、「学内グローバルPBL」の設計に向けた最初の調査として、2015年の夏に開催した、短期滞在外国人学生と日本人学生との、英語を使用言語としたグローバルPBLへの参加度合いと、一部の日本人学生へのインタビューから抽出されたキーワードを考察するものである。

2 留学生と交流する学内グローバルPBL

現在では多くの日本の大学で留学生が学んでおり、日本人学生と交流する機会が増えているにも関わらず、留学生は異文化間環境に置かれ、サポート資源が少ないとの報告⁶⁾がある。また、中川⁷⁾は、日本人学生と留学生との接触が頻繁になされていても互いに相手文化を理解していることには必ずしも結びついていないと指摘する。「学内グローバルPBL」の最大の魅力は、日本人、留学生、双方にとって自国で学んだ英語を使用する他流試合の場となることである。現在、日本に在学する留学生の多くは、中国や韓国に代表されるように、母語を英語としない学生であり、英語に対するハンディキャップは日本人学生とほぼ同等である。滝沢⁸⁾の研究では、英語非母語話者同士の英語会話は、英語非母語話者と英語母語話者との会話と比べ、話者交代時の重複率と重複のタイミングが異なり、流暢性が高いことを示している。林、小野⁹⁾も、英語圏で第一言語として話されている英語をモデルとしてアングロサク

ソン民族文化を偏重するような教育を実践するのではなく、英語を外国語／第二言語として話す人々との意思疎通にも焦点を置く教育が実践されなければならないとしている。これらの背景からしても、「学内グローバルPBL」は日本人学生と留学生、双方のニーズを満たすコンテンツとなり得るものと考ええる。

留学生と日本人学生との交流による効果に焦点を当てた研究には、他文化交流合宿を通じ、日本人学生と留学生の友人関係に至るプロセスに焦点を当てたもの¹⁰⁾、二言語併用ゼミ・授業における参加者の言語使用の実態や課題をさぐるもの¹¹⁻¹⁵⁾、留学生と日本人学生との混合クラスにおけるバイリンガル学生の果たす役割について述べたもの¹⁶⁾、留学生との接触経験の有無と大学教育への適応と関連性について考察したもの¹⁷⁾、留学生との交流と海外勤務志向への意識変容について考察したもの¹⁸⁾、留学生が日本人学生へ与える影響について理論的枠組みから考察したもの^{19,20)}がある。本稿で扱うPBLは、これらの先行研究を参照しながら、短期間である程度の信頼関係が築け、英語力が高なくてもワークに参加できることを意識し設計したものである。テーマは全参加国にとって共通の問題となっている高齢化社会を見通した、ユニバーサルデザインを扱った。

3 施行したグローバルPBLの枠組み

■タイトル：International Summer School (以下ISS)

■狙い：①異なる文化背景を持った学生たちが交流し、国籍混合の多様性のあるチームで、グローバル人材のコンピテンシー（高業績者の行動特性）を育む。

②片言の英語でも自己表現し、簡単に妥協せず、対立を楽しみ、合意形成のプロセスを体験する。

③社会と技術工学の関係性を考えながら、革新的なユニバーサルデザインのアイデアを考える。

■参加大学：日本のH大学12名、日本のK大学12名
韓国のP大学15名、台湾のN大学4名
合計43名

※外国人学生は、同PBLのためだけに来日した学生である。

■開催場所：広島県内のホテル

■開催時間：2015年8月24日～26日

全体スケジュールは表1のとおり。

表1 全体スケジュール

一日目 オリエンテーション	・アイスブレイク ・参加の心得とルール ・ワークショップ(マシュマロ チャレンジ) ・講演1 ・グループ自由行動
二日目 フィールドワーク& グループワーク	・講演2 ・車椅子使用法ガイド ・チーム毎でホテル内フイ ールドワーク ・グループワーク ・中間発表
三日目 コンペティション	・リードユーザーからのフィ ードバック ・プレゼンテーション ・審査と表彰

■課 題：各チームに一台貸し出された車椅子を体験し、ハード面やソフト面の課題を発見し、解決するユニバーサルデザインのアイデアを提案する。使用言語は英語。(母語による通訳は許可)。図1は一つのチームがホテル館内を車椅子で移動する様子。



図1 車椅子体験の模様

イベント第一日目は初対面同士の学生ができるだけ早く打ち解け、信頼関係が築けるようマシュマロチャレンジなどのゲームを取り入れた。第二日目に予定していた宮島での屋外フィールドワークは、台風のため急遽宿泊先のホテル内施設を利用したワークとなった。第三日目には実際に車椅子を利用するリードユーザーからのフィードバックをもらった後、コンペを行った。

4 研究の手法と結果

本研究は、ISSで行われたグループ討議における学生の発言量とISS受講者へのインタビューから抽出されたキーワードの考察との二部構成になっている。

4.1 学生の英語による発言量(頻度)の調査

これまでに発表されている留学生と日本人学生との交流活動研究の多くが、著者の授業観察によるものや受講者へのインタビューを考察したもので、実際に学生たちがどの程度英語を使ってコミュニケーションをしているかという定量的な調査に基づく報告は見当たらない。そこで今回の調査では、(1)ひとつのチームのワークを100分間撮影したビデオより、英語によるコミュニケーションの頻度を計測する、(2)個人の英語力と英語の発言量が相関するか調査することを目的とした。尚、今回のインタビュー対象者は、対面インタビューが可能な、著者の所属するH大学の学生に限定した。

表2は、インタビュー対象者の属性、および、チーム英語力とメンバー編成を表したものである。Dチームの学生一名とC、Gチーム学生の内一名は、時間調整ができずインタビューリストから削除し、計9名を対象とした。英語力の評価は、殆ど会話として成立しないを1点、高卒程度で簡単な会話なら可能を2点、英語で7割くらいの会話が可能を3点、ほぼ問題なく会話可能を4点とし、自己評価も含め、他者の英語力を評価してもらった。Eチーム、Hチームの「本人英語力」は、自己評価ともう一名のメンバーからの評価を足して2で割り平均化した。本来であれば、TOEICやTOEFL等の標準化された指標を用いるべきところだが、これらのテストを全学生が受験しているわけではなかったので自己評価を採用した。

表2 インタビュー対象者の属性とチーム情報

所属 チーム	学生名	学年	チーム平均 英語力	本人英語力	学生割合 (日本、韓国、台湾)
A	学生A	D2	2.5	4.0	2,3,0
B	学生B	M1	3.4	3.0	3,2,1
C	学生C	科目履修生	2	2.0	3,2,0
E	学生E1	B3	2.7	3.5	3,2,1
	学生E2	M1		1.6	
F	学生F	M1	2.9	2.0	3,2,1
G	学生G	M1	2.8	1.5	3,2,0
H	学生H1	M1	2.2	2.0	4,0,1
	学生H2	B3		1.0	

※Dチームを除いた、7チームの平均英語力は、2.6

※インタビュー回答者の平均英語力は、2.3

※D=博士課程、M=修士課程、B=学士課程

4.1.1. 英語と日本語の発言頻度

図2はビデオ撮影したチームH内の英語による発言回数を5分刻みで計測したもので、発言の長さの総量ではなく、頻度に焦点を当てたものである。同チームを選択した理由は、H大学の学生が2名所属することから、事後のインタビューでより多角的に事象を捉えることができるのではないかと考えたこと、「学内グローバルPBL」を想定した場合、留学生がチームに入る人数は現実的には1名ないしは2名のケースが多いだろうと想定したことによる。このグラフを見ると、100分のワークを通した5分毎の英語発言頻度の平均が11.2回であったことから、30秒に1回はなんらかの英語コミュニケーションが発生した計算になる。日本語による5分毎の発言回数は8.3回であり、英語の発言頻度が日本語の発言頻度を上回ったことが分かる。英語使用をルールと課したものの、5名中4名が日本人であったことを考えれば、メンバー全員が相応の態度で英語によるグループワークに臨んだものと考えられる。

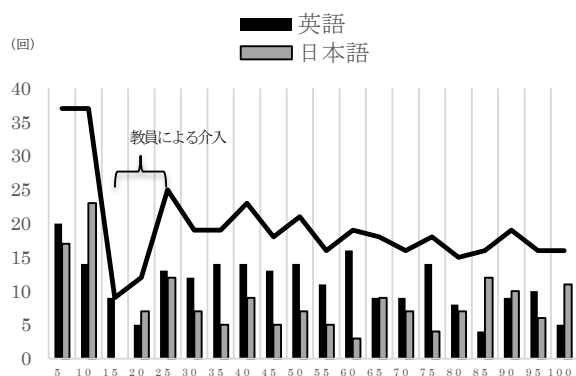


図2 チームH内における時系列総発言回数の推移

一方、開始10分の時点で日本人の教員（在米歴20年）がディスカッションを促進する目的で「POV statement」⁴というデザイン思考で使用される用語を使用しながら、学生たちの考えを英語で整理しようと試みたが、彼らのヒアリング能力が追いつかず、逆に混乱が生じ25分以降の発言量が相対的に下がった。ビデオの様子を観ると、誰もが発言することによって教員の指示が理解できていないことが露呈することを恐れ、席を離れたたりお菓子や飲み物に手を付けたりしながら、他者のリードを待つかのような姿勢が映し出されていた。

また、後半で日本語の頻度が高くなったのは、時間内に方向性を集約するため、母語に頼ったコミュニケーションとなったことがビデオから見て取れる。PBLに慣れた学生がいたら、全体の時間配分を見ながら効率的に討議を進行し、最後まで英語中心のコミュニケーションを維持できた可能性はある。

4.1.2 英語力と発言量

図3は、チームH内における、メンバー別の英語発言回数の推移を示す。このチームは、H4が台湾人学生で、その他は全員日本人学生であった。メンバーの英語力と5分毎の英語発言量との関係は、H5が2.4点/1.75回、H4が3.5点/3.0回、H3が2.5点/3.5回、H2が1点/2.25回、H1が2.2点/0.35回であった。一般的には、チーム内での発言量は、英語力に比例し、H4>H3>H5>H1>H2の順番になることが想定されるが、結果はH3>H4>H2>H5>H1となった。その背景として、日本人学生の中で最も英語力の高いH3が、留学生と他の日本人学生とのパイプ役になるケースが多かったためである。また、H2は事後のインタビューにより、過去の英語に対するトラウマをこのPBLで払拭したいという強い覚悟を持って臨んだため、英語力は最も低い評価であったが、積極的な発言となったことが判明した。

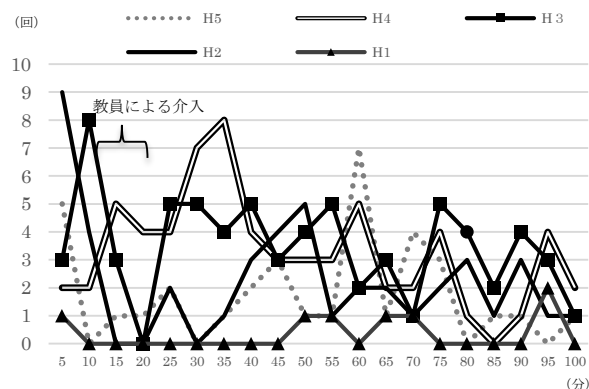


図3 チームH内メンバー別時系列発言数の推移

一方、英語力ではH2に勝るH1の発言量が低くなった背景には、ISSのイベント中に英語に対するモチベーションが低下したことに起因することが、その後のインタビューで判明した。ISSに集まった他の日本人学生の高い英語力に触れ、キャリア形成を英語力以外に求めることへと考えがシフトした模様である。

また、H5 の発言量は多くなかったが、ビデオを観るとメンバーが討議している間にネットで情報検索したり、事前に印刷した資料をメンバーに配布したりするなど情報収集の面でチームに貢献しており、数字では表れて来ない活動をしていたことも判明した。PBL 参加者を評価する場合には、発言の量的側面のみではなく、活動の内容的側面の双方から総合的に調査する必要があるだろう。

4.2 受講生インタビューによる、キーワードの構造化

次に、受講者に対して行ったインタビューの内容を定性的に分析する。先述のとおり、留学や留学生との交流が学生のグローバルマインドの醸成に寄与する報告は多数ある。それらの多くは、主に文系学生を対象にしていること、そして参加者の多くが自ら手を挙げてプログラムへの参加を名乗り出ていることから、グローバル人材のコンピテンシーとしていくつかの調査^{21,22)}で上位に挙げられている「外国文化への関心・好奇心」と「挑戦力」が備わった、いわゆるグローバル人材予備軍を対象としたものである。「学内グローバル PBL」は、国際交流にさほど関心の高くない学生に対し、グローバルな視点を持たせるきっかけとなる場としての期待がある。今回 ISS に参加した H 大学 12 名の内、6 名（文系 5 名、理系 1 名）は自ら名乗り出たグローバル人材予備軍であり、6 名が研究室の教員に勧められて参加した理系の大学院生である。その意味で両群から抽出されるキーワードの差異は、「学内グローバル PBL」の設計に当たり、注目すべき観点であるものと考ええる。

4.2.1 調査方法

ISS に参加した H 大学の学生 12 名を調査対象とした。うち、インタビューの日程調整が可能だった 8 チーム 9 名に対し、40 分程度の半構造化の個別面接を行った。グループインタビューではなく、個別に行った理由は、他者の評価や意見に流されたり、他者に配慮した回答ではなく、ISS に対する率直なフィードバックをもらう意図があった。尚、インタビューは終了後の態度変容の有無を含めて確認するため、ISS 終了 1 ヶ月後に行った。インタビューの項目は、「学内グローバル PBL」の設計に向けた手掛かりを得ることを目的で実施する観点から、「ISS の満足度と全体的な感想」「終了後の態度変容」「英語が通じなかった時の対応」「対立が起きた場合の合意形成プロセス」「理想的な学内グローバル PBL の形態」の 5 点に絞った。

4.2.2 分析手法

分析の手順として、まずインタビュー内容を逐語録に起こして切片化した。次に切片化されたデータをコード化した後、類似項目をまとめ、サブカテゴリーを生成した。さらにそれらの概念を抽象化したカテゴリーを生成し、最後に複数の概念からお互いの関係やプロセスを視覚的に表現するモデルを作成した。

4.2.3 分析結果

分析の結果、表 3 に見られるように、4 つのカテゴリーグループ、12 のカテゴリー、26 のサブカテゴリーが生成された。これらを大別すると、「英語学習の動機」と「コンピテンシー」が、グローバル PBL の効果について確認するもので、「授業形態」と「授業環境の整備」がグローバル PBL の改善に向けたものである。

表 3 生成されたカテゴリーと発言例

カテゴリーグループ	カテゴリー	サブカテゴリー	発言例	発言番号
英語学習の動機	英語力の客観視	英語学習とのギャップ	英語の必要性だったり、普段の英語との違いを痛感しました。(中略) 普通の日常会話だったら、極論、一方通行でも行けるというか、納得させるような深いことは必要ないんじゃないかと。(F)	①
		英語力不足による妥協	段差だったら、押す人のストレスを全部解消出来とは思ってたんですが、現実味と言われたら、英語力で説得できなかったのが悔しくて・・・説得するだけの力がなかったです。(G)	②
	意識変容なし	英語と進路の非連続性	その後は、正直あまり変わってないですね。自分は教師になるうと思ってるんですが、高校の理科になればいいかなと思ってるんですが。(E2)	③
		英語学習の必然性	海外の人間と仕事をやるというところまでは、イメージできないですね。海外に特に行きたいとは思わないのですが、英語は避けては通れないと思います。(F)	④
		研究に必要な英語	共同研究で英語を使うときは、よく教授から漏れや抜けがないか注意されます。そこが正確に伝わらないと、最初から実験をやリ直さなくちゃいけないんです。(G)	⑤
	意識の向上	伝わる喜び	「if」の文章とか、難しい構文が使えないとできないと思ってたんですよ。あ、話せる！というのは思いました。(H2)	⑥
	意識の低下	英語学習への見切り	逆に、こんだけ彼らが英語が喋るんだったら、僕がしゃべれらんくてもいいかなと。それこそ、英語喋れる方がいらっしやるんだったら、ぼくも同じ土俵で戦わなくても、日本語しか使えないメリットってあると思ったんで(H1)	⑦
		国内学習への見切り	英語の勉強はしたいなという思いは強くなりましたが、繋がってはいないです。そういう環境に入るのが一番手っ取り早いのかと思いました。(C)	⑧

コンピテンシー	留学生からの刺激	留学生の意識の高さ	台湾の方と、韓国の方は、誰っていうことなく、日本に来る人なんで、英語力はすごいなと思いました。(H1)	⑨
		リーダーシップモデルのイメージ強化	彼らを見て、英語の能力はもちろんのこと、何よりも、俺がやるという姿勢、リーダーシップは、日本人同士で、誰か一人が説明しなくてはならない時には、押し付け合いが始まる時、「xxやってよ」というと、「おっしやー」という姿勢。あの姿勢は見習わなくてはならないなと思いました。(F)	⑩
	対立と合意形成	協調性の重視	意見が割れても、お互いの意見をなんとか取り入れようとしていました。真反対でも意見を入れようとしていましたね。(E1)	⑪
		メンバーの英語力不足による消化不良	お互いが英語科を理解して、譲り合いをする空気でした。(C)	⑫
授業形態	ハンズオンワークの効果	フィールドワークがもたらす、交流効果	最初、韓国の二人がずっと喋っていて、自分は英語で頑張ろうとしていたので、ちょっと嫌な気がしたんですよ。やはりフィールドワークのころから、「俺乗るよ」「じゃ、押すよ」となり、徐々に話し始めましたね。ワークが大事だと思えますね。テーマ(討議形式)だと、同じ国の人同士が喋るような印象ありますね。(E2)	⑬
		ものづくりワークの求心力	話し合いだけだったら、結論は出そうと思えば出せるし、何かできるまでは終われないと思えば、やらざるを得ないし、頑張ると思います。(F)	⑭
	親近感のあるテーマの設定	生活に密着したテーマの選定	車椅子のテーマだけでも、各グループの個性が出て面白かったんで……。想像しやすいテーマというか、身近なテーマというか。(H2)	⑮
		馴染みのないテーマに対する不安	ユニバーサルデザイン、背景知識がないのにできるか、期待しているのと同時に心配もありました。(A)	⑯
	集中講座による開催	英語漬けによる効果の確認	3日英語漬けになると、最初に比べたら聞き取りも上がっていたと思います。(G)	⑰
		開催期間	夏休みで、集中講座でやるくらいがいいんじゃないでしょうか。週1でやると、薄れるような気がします。(F)	⑱
		非日常の環境	これはテストではないので、集中講義とかすると、非日常で体験できるところでやるいいと思います。(G)	⑲
		段階を追った設計	今回は二つの目的があったと思ったんですけど、英語でやるから、ビジネスモデルのことをあまり考えることができなかったと思うんです。E1さんだったら、今回のようなワークでよかったと思います(H1)	⑳
授業環境の整備	ツールの整備	ワーク目的の共有不足による意見のズレ	プレスとか、インベーションのあり方とか、意識を共有していれば良かったですね。構造とか素材とか、私はその辺ぶっ飛ばして考えて、ワークでは機能的に車椅子を使わないという方法も提案したんですが、「許さねえ」という意見などが出てきて、流れが作れませんでした。(C)	㉑
		アプリの活用	ラインの通訳アプリですね。みんな使ってたんで。ただ通訳アプリも、本当に伝わっているのかは怪しいという思いはありました。(C)	㉒
	英語不安への対応	アセスメントの活用	ぼくらはそこ(コンペの審査基準)前提で進んでいたんで。なかった方がどうやった方がいいかもまだなかった可能性はありますね。(G)	㉓
		飲み会や会食のリラックス効果	飲み会とかがあると、喋りやすくなりますね。飲み会でちょっとしたゲームをやって、次の日のガサの授業ワークにつなげる。授業だと、ちゃんとした英語を喋らなきゃいけないんじゃないかという気持ちになって、なかなか喋れないんですよ。(B)	㉔
	英語不安への対応	英語力の高い学生の存在が及ぼす安心感	日本人で分かる人がいてくれたのは嬉しかったですね。ほとんどE1さんをお願いして、困ったことはなかったですね。(E2)	㉕
		ノン・ネイティブスピーカーとのワークがもたらすリラックス効果	イギリス(留学先)は、お互いがみんながわかっている。早いし、置いていかれている感があった。プレッシャーがあった。できないかも……。宮島は同じレベルで、下手な英語同士で前向きに頑張ることができた。(E1)	㉖

4.2.3.1 英語学習の動機

このカテゴリーグループは、「英語力の客観視」「意識変容なし」「意識の向上」「意識の低下」のカテゴリーに分けられた。①に代表されるように、学生たちは初等教育から大学教育を含め授業の内外で英語力を獲得してきたはずだが、合意形成を目的とした授業の下ではそれまでの英語力では十分に通用せず、「日常会話」レベルを脱していないことを痛感することとなった。「意識変容なし」を構成する③④の発言者らは、教員に背中を押されて参加した理系学生だが、彼らはISSを通して英語の必要性は感じたものの、その後の英語学習への動機付けにまではいたっていない。⑥は英語力の低い学生が「伝わる」喜びを体験したことで学習の動機付けにつながっている。逆に⑦⑧は自主的に参加した学生らの発言であるが、ISSの体験を通じ、英語学習の動機は低下した。

4.2.3.2 コンピテンシー

このカテゴリーグループは、「留学生からの刺激」「対立と合意形成」のカテゴリーに分けられた。⑨⑩に見られるように、留学生の語学力や能動性に触発されたシーンもあったようである。キャンパス内にも意識の高い能動的な学生はいるであろうが、それらを国

際交流という文脈で留学生から感じ取った場合、日本人から受ける刺激よりも自らの立ち位置をグローバルな環境から客観視できる点で、より刺激的に受け取られるのではないかと。また今回のグローバルPBLのオリエンテーションでは、「対立を楽しみ、合意形成のプロセスを体験すること」がひとつの狙いとしてあったが、⑪⑫で見られるようにむしろ対立を避ける傾向が見られた。対立を楽しめる環境づくりとして、オリエンテーションでのアイスブレイクや初日の夜にチームで自由行動する時間を設けるなど配慮したが、やはりそれだけでは初対面同士の学生間で対立を楽しめるまでの信頼関係を築くことは難しかったようである。そしてそれ以上に、英語で対立するための必要条件となる、英語での理解がおぼつかないため、限られた時間の中では対立よりも接点を探すことに意識が集中したものを見受けられる。

4.2.3.3 授業形態

このカテゴリーグループは、「ハンズオンワーク(体を使うことによる学習)の効果」「親近感のあるテーマの設定」「集中講座による開催」のカテゴリーに分けられた。言語によるハンディキャップをボディランゲージで補うハンズオンのワークについては、概

ね好評であったようだ。また、今回の課題は「車椅子体験を通したユニバーサルデザイン」で、⑩に見られるように、一般的に馴染みのないテーマで一部の学生には不安もあったようだが、ハンズオンのワーク形態を採用することで、「とっつきにくさ」という障壁は取り除かれたようだ。また「学内グローバルPBL」を単位化することを想定した場合、出来るだけ多くの学生に参加してもらう環境を整備する必要がある。その際、通常の週1回ペースの授業で15回開催とするのか、集中講義にするかという選択がある。本プログラムは2泊3日の集中的なプログラムであったが、このような形態については、一名を除いて好意的な意見であった。缶詰にされて逃げられない環境に身を置くことで、集中力を保てたという意見もあった。

4.2.3.4 授業環境の整備

このカテゴリーグループは、「段階を追った設計」「ツールの整備」「英語不安への対応」のカテゴリーに分けられた。「段階を経た設計」に関して、今回の試みは「学内グローバルPBL」を想定した課題を抽出する目的で様々なテーマを盛り込んだために、⑳㉑に見られるようにワークの途中で当惑した学生もいたようだ。特に㉑の発言者は、ISSに参加することで英語学習のモチベーションが低下した学生の一名である。「ツールの整備」についても、使用する側の予備知識や英語力を考慮しなければ、先述のグループHのビデオ観察で明らかになったとおり、教員が介入してツールを説明することで、討議に水を差すことにもなりかねない。逆に㉒のように、ツール（この場合はコンテストの評価アセスメント）を提供することにより、当初の目論見どおり、議論が活性化したチームもある。「英語不安の対応」は、最も集客に重要な観点となってこよう。興味深いのは、㉓に代表されるように、多くの学生が「間違った英語をしゃべってはいけない」という強迫観念を持っていることである。この対応については、「学内グローバルPBL」で交流する留学生の想定が母語を英語としない国の学生なので、㉔の学生のような体験談を口コミで広げる、または、㉕の発言に見られるように、英語力の高い学生がいることの安心感を事前に伝えながら敷居を低くすることが重要であろう。図4は、これらを構造化し、概略化したものである。

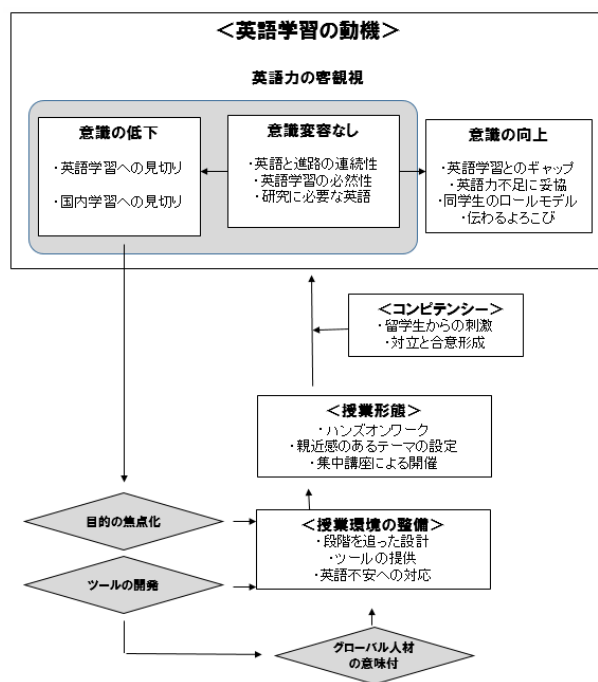


図4 生成されたカテゴリーの構造化

◇ は、筆者が考えた対応策

5 結び

本稿では、英語を使用言語とした外国人学生と日本人学生とのグローバルPBLを通じ、日本人の参加度合いと、一部の授業参加者へのインタビューから抽出されたキーワードを元に、「学内グローバルPBL」の授業設計に向けた考察を行った。その結果、以下の課題が明らかになった。

5.1 受講者のレディネスに応じた設計

今回のISSに参加した学生は、表2に見られるように、学年、専攻、PBLの経験、英語力等の面で、多様性に富んでいた。加えて、初対面同士であることから、信頼関係が十分に構築されず、当初の目的とした違いや対立を楽しみつつ、「第三の選択肢を当事者同士で創造する」段階までには至らなかった。その域を経験させるためには、母語によるPBLを十分に体験し自己表現する習慣が身につけていること、グループとチームの違いを熟知し、互いに尊敬しながら意見を戦わせることが良質な意思決定に結びつくことを理解していること、正解のないテーマを扱う際に有効となるデザイン思考のツールを使えること、そして少なくとも本稿で設定したレベル3（英語で7割くらいの会話が可能）以上の英語力が備わっている必要がある。

だろう。一見、非常に高度なことを求めているように見えるが、英語力以外は、近年多くの大学で採用されているアクティブ・ラーニングの中で獲得できるコンピテンシーである。これより「違いや対立を楽しむ学内グローバルPBL」の設計には、それまでに幾つかのステップを踏ませた後、2〜3ヶ月かけたPBLで集大成とすることが望ましいものとする。その理想像を射程に入れながら、まずは受講者のインタビューにもあったとおり、2泊3日の短期集中講座でイベント的な要素を組み込みつつ、英語を母語としない学生同士でブローケンな英語でも意思疎通することができる楽しさを経験させることから始めるのが妥当だろう。

5.2 英語学習への動機付け

国際交流や留学を体験した学生の多くは終了後に高揚感があるため、自己評価やプログラムへの評価は高得点になる傾向がある。しかし重要なのはその後のグローバル人材に向けたマインドシフトである。インタビューを1ヶ月後に設定したのはその効果を確認する意味があったが、背中を押されて参加した学生の6名のうち、インタビューができた4名に関して言えば、英語の必要性は理解できたものの、その後の英語学習にはつながっていない。彼らは理系の大学院生であるが、英語へのモチベーションの動機付けとならなかった要因として、③⑤の発言から、理系に求められる英語力と、文系に求められる英語力に違いがあるのではないかという仮説が浮上する。それらの違いが何かを調査した上で、理系の学生に対する「学内グローバルPBL」の利益を訴え、参加を促す必要があるだろう。

6 今後の課題

本稿はひとつのグローバルPBLを通じた考察であるが、他大学との共同研究ではなかったことから、全チームのビデオ撮影、全学生に対するインタビューが叶わなかった。また本稿で扱う英語力は、本文中でも触れたとおり、参加者の主観によるものであることから、本研究結果の客観性には限界がある。今後は英語力の定義を明確に設定した上で、学年、学部、テーマ、授業形態、ツールの有無、レディネス等の変数を掛け合わせながら、学生の参加度と発言の質、授業後

の態度変容等を最大化させるための研究を続けていく必要がある。また、本稿が射程とする留学生との「学内グローバルPBL」を実現するためには、学内留学生向けのプログラムとの連携を視野に入れ、PBLのルールやPBLで使用するツールを共通化する試みも重要となつてこよう。グローバル化の波でグローバル教育のカリキュラムを試行する大学が増えているが、多くの大学では、明確な目標設定のされた国際カリキュラムが大学で構築されておらず、それに到達する現実的手段が学生にとって明確でないことが問題視されていることから²³⁾、「学内グローバルPBL」を教養科目で行うのか、専門科目で行うのか、またはどの学年で行うのか、異学年混合で行うのか等、学内カリキュラムとの整合性も視野に入れた設計が望まれる。

注

- [1] チームビルディングで使用するゲームのひとつ。マシュマロと乾麺のパスタ、紐とテープを使い、自立可能なタワーをできるだけ高く建てるもので、最も高いタワーを建てたチームが優勝となる。
- [2] Point Of View（着眼点）の声明で、デザイン思考のワークショップにおいて使用される用語。商品やサービスのユーザーのインタビューを通し、彼らの問題がどこにあるのかを抽出するもの。

引用・参考文献

- 1) 加藤優子.(2014). 留学によって育まれるグローバル人材の要素についての一考察 ―異文化トレーニングの可能性と課題― 仁愛大学研究紀要 人間学部篇 第13号 51-61
- 2) グローバル人材育成推進会議.(2012) グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)
- 3) グローバル人材育成推進会議 前掲資料
- 4) 産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会.(2010). 報告書 ―産学官でグローバル人材の育成を―
- 5) 勝又美智雄.(2014). 全員留学によるグローバル人材の育成(国際教養大学の挑戦と展望) グローバル人材育成教育研究 第1巻第1号 22-29
- 6) 加賀美常美代.(2007). 大学キャンパスにおけるコミュニティ・アプローチによる留学生支援 臨床心理地域援助特論 放送大学教育振興会、161-178
- 7) 中川かずこ.(2012). 日本人学生と留学生の異文化交流 ―異文化接触、協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容― ウェブマガジン『留学交流』2012年4月号 vol.13
- 8) 滝沢恵子.(2013). 日本人学習者の英語コミュニケーションにおける苦手意識と流暢性 ―質的調査と量的調査からの分析― 人間科学研究 Vol.26、

Supplement

- 9) 林裕子、小野博.(2014). グローバル人材育成を目指した短期集中英語学習とその効果 グローバル人材育成教育研究 第1巻第1号 55-65
- 10) 小松翠.(2015). 留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものかー他文化交流合宿3か月後のインタビューからー 人文科学研究 No.11, 165-179
- 11) 吉野文・西住奏子.(2015). 「二言語併用ゼミ」の場面における参加者の言語使用ー座談の分析に関する一試論ー 国際教育 International Education Vol.8 35-50
- 12) 井之川睦美.(2003). 体験学習法による日本語と英語を併用した活動ー短期留学生日本語コース交流授業における試みー 群馬大学留学生センター論集 3 39-53
- 13) 大藪加奈.(2003). 異文化理解と表現ー留学生との合同授業の試みー 言語文化論叢, 7 47-58
- 14) 鈴木庸子、島崎美登里.(2002) JLP と ELP による国際交流授業ー討論とグループ・プロジェクトの試みー ICU 日本語教育研究センター紀要 11 69-78
- 15) 宮本美能.(2012). 『国際交流科目』の受講を促す方策ー一般学生が抱える言語の障壁を低減する取り組みー 大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流 第16号 89-95
- 16) 宮本美能.(2013). バイリンガルの学生が果たす役割ー留学生と日本人学生の混合クラスにおけるー考察ー 大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流 第17号 65-71
- 17) 中川かず子. 前掲
- 18) 茂戸藤恵、リクルートワークス研究所・研究員.(2012). Works review : リクルートワークス研究所研究報告 7 22-35
- 19) 中野はるみ.(2006). 異文化教育における留学生の役割 長崎国際大学論叢 第6巻 55-64
- 20) 加藤優子 前掲
- 21) 日本経済団体連合会.(2015) 「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート」 主要結果
- 22) 経済広報センター.(2013) 「グローバル人材の育成に関する意識調査報告書」
- 23) 恒松直美.(2006). 短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の日本人学生への開講ニーズ調査 広島大学留学生センター紀要 16号 31-53

受付日 2015 年 11 月 30 日、受理日 2016 年 3 月 29 日